

法話

『念ずれば花ひらく』 の禅的吟味

丸川 春潭

1 はじめに

いつの頃からか分かりませんが、拙宅に『念ずれば花ひらく』と題する、小さなCDが紛れ込み、念ずれば花ひらく のさびの部分やたらに繰り返されて耳に残っておりました。年賀状を書きながら聞いていて、賀状の添え書きに、この 念ずれば花ひらく を書いて出しましたところ、正月が明けて松山(愛媛県)の友人から、年賀状の 念ずれば花ひらく は、愛媛県に住んでいた詩人坂村真民先生の詩であると知らされ、後日膨大な真民先生に関する資料を頂戴しました。

賀状の反響の中には、念ずれば花ひらく は、禅には馴染まない と評する御仁もおられました。小生はそうは思わないで、いつか機会があったら吟味してみたいと考えていました。

2 科学と芸術と禅

小生は大学も理系であり、文学とか詩について云々する何物も持ち合わせてはいません。したがって、坂村真民先生の詩を文学的に評価することはもちろん、まともに味わうこともおぼつかないものであります。

そこで、まず科学と芸術と禅の位置付けをしておきたいと考えます。人間禅の創始者である耕雲庵立田英山老大師は、自然科学者（生物学専攻）であります。芸術においては（特に老大師は技芸道と名付けられておられますが）、書・絵画・俳句・陶芸・写真に通じておられ、すべて名人の域まで達しておられた方です。この老大師の著書『人間形成と禅』において、科学と芸術（技芸道）について語られているものを参照して見ましょう。

一般に真理を求むる自然科学が、事実をもととして、理知的であり客観的であるのに反して、美を追う技芸の面では、真実をもとにして感情的であり主観的であります。

技芸道は、大自然（人間を含めて）の生命の躍動を把握し、これをそれぞれの技法によって、美として再現する道であるといえましょう。

もし技芸家が、自己の心しんしょう性を見つめ万象の物もっしょう性に徹し、大自然の生命と融合するまでに昇華することができたならば、それは物我不二・心境一如の境地であって、これは、技芸道と宗教道との畔が切れて、渾然あぜ一体こんぜんとなった場です。

耕雲庵老大師が、隠居される前のご提唱で申された一節に次のような言葉があります。

宗教の根源・禅は、文字で表したり、言葉で説明したりすることが出来ませんが、詩や短歌や俳句での言葉は、単なる言葉や文字ではなく、言外の意味を味わうことが出来ます。そういう詩歌では、禅の境地に限りなく近づくことができ、禅の境涯を味わう

ことが出来ます。したがって日頃からこういう詩歌を趣味とすると、日常生活を禪的に味わうことができ、これは禅による人間形成の境涯を磨くことにつながります。

と述べられました。

3 芸術（詩人坂村真民）のすばらしさと限界

（1）庶民詩人坂村真民先生の宗教性

坂村真民先生の詩人としての評価は、最初に申し上げたように、小生にはできません。しかし、先生の詩を通して出てくる作家としての人間を禪的に評価することはできます。詩の文学的な味わい方はできないけれども、もっといえば、詩を読んで味わうよりも、詩を作った人間の評価を、詩を通してするということであります。

坂村真民先生は、民衆詩人であり、悩める民衆に生きる勇気と希望と力を与えることのできる詩人であると思います。そして日本の中央文壇において広く認められた詩の巨匠ではないようですが、真民先生の詩を刻んだ石碑が全国に700基も建っているという、すそ野の広い詩人であります。

真民先生^{いわ}曰く「僕は、文学も詩歌も知らない、普通の庶民のおばさんたちが、子供をおんぶしながら僕の詩を読む。こういう人のために詩を書く。底辺の世界に住んでいる人たちのために詩を書く。」

そして坂村真民先生は、単なる詩人ではなく、それを超える宗教者としての側面、耕雲庵老大師の言葉でいえば、宗教道まで入り込んだ詩人と



坂村真民先生(1909～2006)
(西澤孝一氏所蔵)

ということがいえるでしょう。実際にも、一遍上人^{しょうにん}をこころから尊敬し、若いときには参禅弁道もされた求道者であります。

真民先生^{いわ}曰く「私は詩人になるために詩を書くんじゃないんです。自分を作り上げるために詩を書いている。詩を書くことによって、自分というものを作り上げる。それで詩を書いているわけです。自分を作り上げるためにそれが天地宇宙の教えなのです。」

坂村真民先生の日常を見ますと、作詩とは別に、三昧^{さんまい ぎょう}の行がいろいろ独特の方法で行じられているのが見えます。したがって、詩人としての日常は限りなく宗教家に近い生活が行取されているといえます。

森信三氏（教育者）曰く「坂村真民氏の一つの背後に、その深き大乘仏教的信を感知しえない人は、いまだ氏の詩業の真価を知る者とはいい難いであろう。」「氏において生きていく大乘仏教の精神なるものは、つねに現代における人類最深の苦悩と切り結んでいる」

そしてまた真民先生は、実践者であります。自分の書いた詩の通りに実践し、実践した生活をそのまま詩にされている、徹底した実践者であります。そしてとにかくこうと決めたら継続実践する。毎日の決めた日課（夜中の12時に起きてから一日のスケジュールが始まる日課）を一日も欠かさず、40年、50年と続けて実践された方です。『詩国』という詩誌を40年以上にわたって500号以上発行し、毎月1,000人以上の人に送り続けられた方です。ちょっと普通の人には真似^{まね}ができないですね。

（2）『わたしは墓のなかにはいない』の作詩者の境涯

『千の風になって』は皆さんよくご存じの通り、紅白歌合戦で歌われてから急に大ブレイクした（人気が出た）歌で、坂村真民先生と同

じ愛媛県出身の秋川^{まさふみ}雅史氏が歌っています。

文末の、原詩（アメリカの詩。作者不詳）の日本語訳と坂村真民先生の詩『わたしは墓のなかにはいない』を比較してご覧ください。

驚くことに、詩の中核をなしているフレーズは全く酷似しています。自分が死んでも墓の中にはいないというドキッとするフレーズ、そして死んだら、風になり、虫になり、鳥になり、光になるという思想が、時代は違い、遠く離れた場所で、おそらく両方の作詩家が独立して（お互いを知ることなく）作詩されたものと思ひますが、これを観て、人の思いの行き着くところは同じなのかなあとの感慨が生じます。

しかし、詩を離れて、この作詞した人物の境涯は、という観点で詩を観ますと、かなり大きな違いがあるように思います。同じようにわたしはお墓のなかにはいないと歌われていますが、坂村真民先生の方が「わたし」が強く残っており、「わたし」が詩の中心にあります。わたしに会いたいなら わたしの詩集をひらいておくれ わたしは墓を建てるつもりで 詩集を残しておくから どうか幾冊かの本を わたしと思うておくれ にそれが見えます。

それに対してアメリカの詩の方が、私の墓石の前に立って涙を流さないでください。私は1,000の風になって吹きぬけています。朝の静けさのなかであなたが目覚めるときに観られるように「わたし」がそれほど濃くはなく、どちらかという語りかけている「あなた」に重きが置かれているのであります。

詩としての巧拙は分かりませんが、小生の『千の風』（米国の原詩）の見方は、『般若心経』の「色^{はんにやしんぎょう}即是空^{しきそくぜくう} 空^{くうそくぜしき}即是色」の切り口と同じ境地を歌っていると観ております（ご興味をお持ちの方は、『禅』28号所載の「『千の風』の禪的吟味」の拙文をご参照ください）。

しかし、真民先生の『わたしは墓のなかにはいない』の詩は、死んだら自分の詩を自分とあって、会いたかったら詩を読んでくれれば会えるよ、というだけにしか読めないのであります。

真民先生の尊敬する一遍上人は、死に際して、自分の身の回りの一切のものをすべて焼き尽くさせて後世に何も残さず帰寂されたとのことでもあります。この詩においてとは、大きな差が歴然とあるということです。人間形成の尺度でいえばまだ一遍上人との差があると思考いたします。

しかしそうはいっても、真民先生の詩の素晴らしさをいささかも減ずるものではなく、真民先生は詩人としては名人の域だし、詩を通して生きる希望を持たせ、勇気を与えたその救済能力は、並の宗教家の比ではないのであります。素晴らしい救済者であり、偉人であることにはいささかも変わりはないのであります。

4 『念ずれば花ひらく』の禅的吟味

『念ずれば花ひらく』のCDから流れてくる繰り返されるさびのフレーズに小生はこころ惹かれたのですが、その詩の作者に興味があっ



真民先生の書

たわけではなく、またそれが、著名な民衆詩人坂村真民先生の詩であることも存じ上げませんでした。そしてこの『念ずれば花ひらく』という真民先生の詩をあらためて読んでみても、特別に感動するものはありません。文学としての詩が分かっていないからと思います。ここに、その詩を引用します。

念ずれば花ひらく

坂村真民

念ずれば
花ひらく

苦しいとき
母がいつも口にしていた

このことばを
 わたしはいつのころからか
 となえるようになった
 そうして そのたび
 わたしの花がふしぎと
 ひとつ ひとつ
 ひらいていった

小生にはこの「詩」は正直言ってあまりよく分かりませんが、念ずれば花ひらく という詩句には何か深い含蓄を感ずるのであります。

古来、洋の東西を問わずすべての宗教には、願いごとや頼みごとが付き物で、それに対する御利益ごりやくを期待するということが、良い悪いは別にして、一般的であります（人間禅には、幸か不幸か全くありませんが）。家内安全、無病息災から始まって昔は雨乞あまごい、今は合格祈願や交通安全、そして極楽へ行けますように、神に召されて天国に行けますようにと、現世・来世の願いごとが宗教のメインの（主要な）役割かのようになっており（お願いごとをしなさい、ご利益を説かない人間禅は宗教とはいえない?!）、実際それを経済的基盤にした、したたかな似非宗教業者がまことに多い時代であります。

本来、本当の宗教には何らかの形で三昧に入る「行」が備わっているものであります。祈り・礼拝・祈念・祈禱きとう・念仏しやうじゆ誦呪・読経・坐禅きんひん・経行、更には宗教的踊りもこの類たぐいでありましょう（この三昧の行が日常において行取されなければ本当の宗教として生きているとはいえません）。この三昧に入る行が願いごとや頼みごとの儀式の形の中に重複しているのであります。すなわち、何かお願いごとを念ずる、家内安全・交通安全・職場安全を祈願するという形と三昧に入る行の形が似ているのであります。

念ずれば花ひらく の解釈をすとなれば、百人百様の解釈があると思います。小生がこれからお話しするのもその一つですが、メジ

ヤーな（大勢の）解釈は、念ずれば花ひらく は、「一生懸命お願いすれば願いが成就する」という解釈ではないでしょうか？

真民先生の『念ずれば花ひらく』の詩のなかの、このことばをわたしはいつのころからか となえるようになった そうして そのたび わたしの花が ふしぎと ひとつ ひとつ ひらいていった を読みますと、真民先生の 念ずれば花ひらく の解釈は、「念じたから（ふしぎに）花が咲いた」ということで、やはり「一生懸命お願いすれば、願いが成就する」という解釈の範囲に入るのであります。

小生の解釈には二つありますが、その一つは真民先生と同じで、「念ずる」という行と「花ひらく」結果の間に、直接的な因果関係が有りとする解釈であります。ただし先生の因果関係は、他力本願的であるのに対して、小生のは自力的であります。

「念ずる」は三昧になるということで、相対界から絶対界に入っていくことであります。本当に深い「念ずる」は、お釈迦様ももちろんそうですが、すべての世界宗教の共通の方向、すなわち相対的思考から絶対的感得の場に向かって入っていくことです。そしてお釈迦様は臘月8日の暁の明星を見て、永遠なるものを自己の内に徹見し（悟りを開き）、これを原点にして迷える衆生の救済のために仏教を開いたのであります。

お釈迦様は悟った時に、「山川草木悉皆成 仏」と述べられました。また達磨大師は、「一華開五葉 結果自然成」（一華五葉を開き 結果自然に成る）という言葉を残されています。白隠禅師は「衆生本来仏なり」と言われました。当然のことですが、お釈迦様も達磨大師も白隠禅師も、同じ切り口を見て同じことを言われているのであります。

深く「念ずれば」三昧に入り、絶対の切り口が見え、「衆生本来仏なり」が当然手に入る。これは「父母未生以前における本来の面目」をはっきりつかむということであり、これを見性入理といひます。

すなわち、念ずれば花ひらく の小生の解釈の一つは、「念ずれば本来の面目を徹見することができ、悟りの眼をひらく」であります。人頼みでも神頼みでもなく、自力で深く「念じて」自得するのであります。本当の自分を探し出し、そしてそれをしっかり把握するのであります。

もう一つの解釈は、真民先生の解釈とも小生の最初の解釈とも全く違い、「念ずる」ということと「花ひらく」ということとの間に、直接的な因果関係を特に考えない解釈であります。これは一見分かりにくいことですが、私はこちらの解釈の方を上位に位置付けます。

「山川草木悉皆成仏」「一華開五葉 結果自然成」「衆生本来仏なり」は、見性入理の見方もできますが、悟りの臭みも抜けた迷悟両忘、悟り終わって悟らざるに似たる「見性了了底」の境涯ともとらえることができる句であります。

たとえば、「一華開五葉 結果自然成」は、これこそ「念ずる」ということと「花ひらく」ということとの間に、直接的な因果関係が有りとする解釈の句ととらえると、上記のような見性入理の解釈もでき、また「達磨大師がインドから来られて一華（花）を開かれたから五家（五つの禅の流派）の葉が開いた」という解釈（これが大勢の解釈）もできます。

これに対するもう一つの解釈として、道元禅師は「一華も五葉も今この時この場所で、ありとあらゆるまにあらわれること」と説かれています。この解釈ですと下の句は、何かの原因が作用して結果が生ずるという解釈ではなく、「結実（結果）は自然に成る」ということになるのであります。この解釈は、「念ずる」ということと「花ひらく」ということとの間に、直接的な因果関係を考えない解釈であります。

「衆生本来仏なり」も、すべてのものは仏性を具有するという見性入理（ピン）の解釈もできますが、同じこの句を、見性入理の「悟り」を脱落した事事無碍法界では、現状の娑婆世界がそのまま寂光浄土で

あり、救われなければならない衆生は一人もいない！というキリの解釈をすることにもなるのであります。

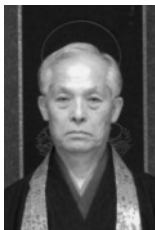
「念じ」ても花ひらくし、「念じなく」ても花ひらくのであります。「念じ」ても花はひらかないし、「念じなく」ても花はひらくのであります。何かのためにするのではなく、一心に念ずる、「無為」で「念ずる」というのが大切なのであり意味が深いのであります。ただひたすら「念ずる」のであり、無念の念を念ずる、無縁の慈悲の菩薩行ぼさつぎょうであります。

したがってというのか、だから、やはり 念ずれば花ひらく なのであります。徹頭徹尾 念ずれば花ひらく に終始するのが良いのであります。ああのこうのと解釈しては、念ずれば花ひらく の妙味を取り損ない、汚してしまうことになるのであります。

坂村真民先生が愛し崇拝してやまないお母さんは、5人の子供を極貧の中で育てながら口ずさんだのは、決して「花ひらく」のを期待して「念じ」ていたのではないと思われてならないのであります。だからこそ5人とも立派に育ったし、多くの人に勇気を与える偉大な民衆詩人が世に出たのであると確信しております。

禅の真髄は、言語・言葉では表現できません。しかし「念ずれば花開く」を繰り返し繰り返し口ずさんでいると、言語・言葉を超えた熱いものが体に満ちてくるように感じられるのであります。 合掌

著者プロフィール



丸川春 潭しゅんたん（本名 / 雄浄）

昭和15年生まれ。大阪大学理学部卒業。住友金属工業技監、日本鉄鋼協会理事を歴任。元大阪大学特任教授。現在、中国東北大学名誉教授。工学博士。昭和34年、人間禅立田英山老師に入門。現在、人間禅教団総裁・師家。庵号 / 葆光庵。

わたしは墓のなかにはいない

作詩：坂村真民

わたしは墓のなかにはいない
わたしはいつもわたしの詩集のなかにいる
だからわたしに会いたいなら
わたしの詩集をひらいておくれ

わたしは墓を建てるつもりで 詩集を残しておくから
どうか幾冊かの本を わたしと思うておくれ

妻よ 三人の子よ
法要もいらぬ 墓まいりもいらぬ
わたしは墓の下にはいないんだ

虫が鳴いていたら それがわたしかも知れぬ
鳥が呼んでいたら それがわたしかも知れぬ
魚が泳いでいたら それがわたしかも知れぬ
花が咲いていたら それがわたしかも知れぬ
蝶が舞っていたら それがわたしかも知れぬ

わたしはいたるところに
いろいろな姿をして とびまわっているのだ
墓のなかなどに じっとしていないことを
どうか知っておくれ

あとに残された人へ 1000の風

作詩：不^は詳^{しい}
訳：南風^{はえ}椎

私の墓石の前に立って涙を流さないでください。
私はそこにはいません。
眠ってなんかいません。

私は1000の風になって吹きぬけています。
私はダイヤモンドのように雪の上で輝いています。
私は陽の光になって熟した穀物にふりそそいでいます。
秋にはやさしい雨になります。

朝の静けさのなかであなたが目覚めるとき
私はすばやい流れとなって駆けあがり
鳥たちを空でくるくる舞わせています。
夜は星になり、私はそっと光っています。

どうか、その墓石の前で泣かないでください。
私はそこにはいません。
私は死んでいないのです。